

『医学教育コース』

— Medical Education Course —

名古屋大学医学部附属総合医学教育センター教授 錦織 宏

Center for Medical Education, Nagoya University NISHIGORI, Hiroshi

医学教育コースは、医療の高度化・複雑化、社会の急速な変化に伴い、医師に求められる能力が多様化している現状を踏まえ、医学教育の質の向上および高度化に資する人材の育成を目的として、名古屋大学大学院医学系研究科に2026年4月に開設された大学院教育プログラムです。

近年、医療を取り巻く環境は大きく変化しています。超高齢社会の進展に伴う疾病構造の変化により、単一疾患への対応のみならず、多疾患併存や慢性疾患の長期的管理、人生の最終段階における意思決定支援など、より包括的な医療が求められるようになっていきます。また、AIやデジタル技術の進展、医療安全への関心の高まり、患者中心の医療の推進、地域包括ケアの進展、医師の働き方改革など、医療のあり方そのものが変容しつつあります。このような変化の中で、医師には高度な専門知識や技能のみならず、コミュニケーション能力、協働性、省察的実践力、継続的な学習能力など、多様な資質・能力が求められています。

こうした時代において、医師をどのように育成するかという課題は、医学教育における中心的なテーマとなっています。かつて医学教育は、優れた臨床医が経験をもとに教育を担うことが当然視される側面がありました。しかし今日では、教育は専門的知識と技能を要する実践であり、科学的根拠に基づいて設計・実施・評価・改善されるべきものとして位置づけられています。優れた教育実践を実現するためには、教育理論への理解、適切な学習者評価、効果的なカリキュラム設計、学習環境の整備、教員能力開発など、多面的な専門性が必要です。

近年、日本の医学教育においても大きな改革が進められています。コンピテンシー基盤型教育の導入、教育の質保証、卒前・卒後・生涯教育の接続、学習者評価の高度化などを通じて、より質の高い医師養成が求められています。一方で、こうした改革を現場で実装し、持続可能な形で発展させていくための専門人材の育成は、必ずしも十分とはいえません。教育改革は制度設計だけでなく、それを現場で理解し、運用し、改善していく教育者の存在が不可欠です。

医学教育学は、こうした課題に取り組む学問分野です。医学という自然科学と、教育学、心理学、社会学、評価学、組織論などの人文・社会科学を架橋しながら、「どのように医師は学ぶのか」「どのような教育が成長を促進するのか」「どのような評価が学習を支えるのか」といった本質的な問いを探究します。対象領域は、カリキュラム開発、学習者評価、Faculty Development、シミュレーション教育、プロフェッショナルイズム、ウェルビーイング、AIを活用した教育、多職種連携教育など多岐にわたり、理論と実践の往還を特徴とする学際的な領域です。

国際的には、医学教育学を専門的に学ぶ大学院プログラムが広く整備されており、教育リーダーや医学教育研究者の育成に重要な役割を果たしています。一方、日本では、医学教育を体系的に

学び、学位として修得できる大学院プログラムは依然として限られています。そのため、教育に高い関心をもつ医師が、国内で体系的かつ学術的に学ぶ機会は十分とは言えず、医学教育の教育・研究基盤のさらなる整備が求められてきました。本コースは、こうした背景を踏まえ、日本では数少ない医学教育学の体系的大学院教育プログラムとして設置されたものです。

名古屋大学大学院医学系研究科は、これまでも医学教育分野において先進的な取り組みを進めてきました。総合医学教育センターを中心に、卒前教育、卒後教育、Faculty Development、シミュレーション教育、医学教育研究など、多面的な活動を展開しています。また、現場で働く教員・指導医を対象とした履修証明プログラム「現場で働く教員・指導医のための医学教育学プログラム(FCME)」を通じて、実践的な医学教育人材の育成にも継続的に取り組んできました。このFCMEは、現場の課題を持ち寄り、理論と実践を往還しながら学ぶ教育プログラムとして高い評価を受けており、本コースはその経験と成果を基盤として、さらに体系的・学術的な大学院教育へと発展させたものです。

本コースは、主として医師を対象とした社会人大学院として設計されています。現職を継続しながら学修することを前提とし、自らの教育実践や所属組織の課題を学びの対象とすることで、理論と実践を往還する学修を実現します。教育技法を学ぶだけではなく、現場で直面する課題を研究として捉え、科学的に分析し、改善につなげていく力を育成することを重視しています。教育現場での実践経験を、そのまま学術的探究の出発点とできる点は、本コースの大きな特徴です。

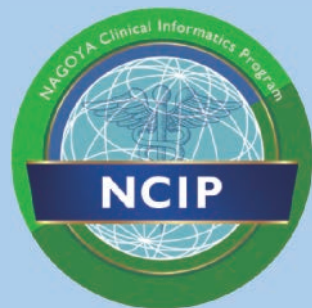
さらに、本コースは、単なる国内向けの教育プログラムにとどまらず、国際的な視野を備えた教育者・研究者の育成を目指しています。医学教育は国際的な知見の共有と対話によって発展してきた分野であり、日本の教育実践や研究成果を国際社会に発信していくことも重要です。名古屋大学大学院医学系研究科は、これまでも国際的な医学教育ネットワークとの連携を積極的に進めており、本コースもそうした国際的基盤の上に位置づけられます。

本コースの修了生には、医学部・大学病院・研修病院等において教育実践の中核を担い、カリキュラム開発、学習者評価、Faculty Development、教育組織運営、医学教育研究など、多様な領域でリーダーシップを発揮することが期待されます。教育現場における課題を理論的・実証的に分析し、改善へとつなげていく能力を備えた人材は、今後ますます重要になります。

本コースは、医師を育てる大学院教育プログラムです。医学教育の実践と研究の双方において中核的役割を担う人材を育成することを通じて、日本における医学教育の質向上に寄与するとともに、国際的な医学教育学の発展にも貢献することを目指しています。

名古屋大学医学部附属病院 メディカル IT センター 名古屋医療情報学プログラム

NAGOYA Clinical Informatics Program, NCIP



名古屋医療情報学プログラム責任者 白鳥 義宗
名古屋医療情報学プログラム事務局担当 宮村 信輝

医療 DX を支える人材育成に向けて 多職種・多分野の専門家による実践的な知識の提供 社会人が時間・場所を問わず学べるオンデマンド型履修証明プログラム [NAGOYA Clinical Informatics Program]

医療分野におけるデジタルトランスフォーメーション (DX) は、電子カルテや部門システムの導入にとどまらず、医療データの利活用、AI を活用した診断・治療支援、サイバーセキュリティ、医療機器開発、創薬、医療政策にまで広がっています。いまや医療情報は一部の専門家だけが扱う特殊な知識ではなく、医療の質と安全を支え、研究開発を推進し、医療現場と社会をつなぐ基盤となっています。

一方で、医療情報は大変に幅が広く、かつ進歩の速い領域であり、これを体系的に学ぶ機会はずしも十分ではありません。医療従事者は日常診療や病院運営の中で、電子カルテ、診療情報管理、データ標準化、情報セキュリティ、AI などに向き合っていますが、それらを横断的に学ぶ場は限られています。IT エンジニアや企業の研究開発担当者にとっても、医療現場の業務、制度、倫理を理解することは容易ではありません。

このような背景のもと、名古屋大学医学部附属病院メディカル IT センターは、2024 年度に履修証明プログラム「名古屋医療情報学プログラム (NAGOYA Clinical Informatics Program, NCIP)」を開設しました。NCIP は、学校教育法に基づき、名古屋大学が修了者に履修証明書を交付する社会人向けリカレント教育プログラムです。さらに、文部科学大臣認定の「職業実践力育成プログラム (BP)」としても認定されており、医療情報ならびにそのシステム開発に関する知識と実践力を体系的に学ぶ機会を提供しています。

NCIP の特徴は、医療情報学を「現場で使える知識」として学べる点にあります。全講義はオンデマンドで受講可能であり、スマートフォンや PC を用いて時間や場所を問わず履修できます。働きながら学ぶ社会人が、日常業務を

継続しながら受講できるよう設計されていることも大きな特徴です。また、厚生労働省の一般教育訓練給付金の指定講座でもあり、一定の要件を満たした修了者は受講費用の一部について給付を受けることができます。修了者には、名古屋大学から履修証明書が交付されるとともに、学修成果を可視化するデジタル修了証 (オープンバッジ) も発行されます。

カリキュラムは、各テーマを「概要」と「実践」の2講義で構成しています (図1)。概要講義では基本概念・制度的背景・全体像を学び、実践講義では医療現場や産業界における具体的な活用事例や実装の考え方を扱います。理

カリキュラム構成

- 体系的に医療情報学を学べる構成
- 全国 40 名以上の専門家が協力
- 各科目ごとに概論、実践
- 特論、双方向授業の講義も
- 40 本以上の講義

主な科目カテゴリー

- 安全に取り扱うための知識
- データの内容についての知識
- システムについての知識
- 利活用の知識・方法
- 運用のための基礎知識
- これからの医療情報など

図1 / カリキュラム構成と主な科目カテゴリー

資格 (複数有り)	人数
医療情報技師	20 名
医師	10 名
診療情報管理士	10 名
薬剤師	8 名
診療放射線技師	7 名
看護師	6 名
臨床工学技士	4 名
理学療法士	3 名
作業療法士	1 名
言語聴覚士	1 名
管理栄養士	1 名
その他	34 名
未記入	36 名

論と実践の両面から同じテーマを学ぶことで、受講者が知識を自らの業務に引きつけて理解できるようにしています。2025 年度は計 44 講義・約 66 時間を実施し、医療倫理・個人情報保護、情報セキュリティ、診療報酬制度と医療経営、医療情報システム、データ標準化、医療データ利活用、AI・未来医療、創薬と IT、プロジェクトマネジメントなど、現代の医療情報学を取り巻く幅広いテーマを扱いました。科目群は「安全に取り扱うための知識」「データの内容についての知識」「システムについての知識」「利活用の知識・方法」「運用のための基礎知識」「これからの医療情報」の6カテゴリーに整理しており、受講者が医療情報学の全体像を俯瞰しながら体系的に学べる構成としています。

講師陣には、医療情報学、医療政策、医療安全、情報システム、産業界、プロジェクトマネジメントなど、各分野の第一線で活躍する専門家を迎えています。大学病院の実務に根ざした知見と、産業界・学術界の幅広い視点を組み合わせることで、受講者は医療 DX を多面的に理解することができます。2025 年度は対面講義や交流会も実施し、オンデマンド学習だけでは得にくい受講生間・講師間の交流の機会を設けました。

受講者の職種・背景は幅広く、医師、看護師、薬剤師、診療情報管理士、医療情報技師、診療放射線技師、臨床工学技士、理学療法士などの医療専門職に加え、医療 IT に携わるエンジニア、企業の研究開発・営業・マーケティング担当者、教育関係者など、医療機関の内外から多くの方が参加しています (図2)。初年度はスモールスタートと思いながら 58 名の応募があり、翌年度には 100 名へと徐々に拡大しています。企業・団体単位で申し込むリスクリダクションコースの利用も広がっており、組織的な人材育成の一環として NCIP を活用する動きも生まれています。

業務分野	人数
医療事務・管理	22 名
医療情報・システム関連	12 名
医師	10 名
営業・マーケティング	3 名
研究開発	2 名
教育	1 名
看護師	1 名
その他	36 名
未記入	13 名

その他の業務分野詳細：保健医療福祉関連業務、各種医療技術職、コンサルティング業務など

図2 / 2025 年度受講生の資格と業務分野 (n=100、資格は複数回答あり)

また、医療情報分野における主要な産業・学術団体からご後援をいただいております。これらの団体との連携を通じてプログラムの充実を図っています。

NCIP が目指すのは、医療情報学の専門家を直ちに養成することだけではありません。むしろ、医療 DX に関わるすべての人にとって、医療情報学を学び始める入口となることです。医療 DX の推進には、新しい技術を導入するだけでなく、現場の課題を理解し、データの意味を読み解き、制度や倫理を踏まえて安全で持続可能な形で実装する力が求められます。NCIP は、医療者と IT・産業界の人材が共通言語を持つための基盤を形成し、その実装力を育てるプログラムです。

今後は、データ駆動型医療、サイバーセキュリティ、医療データ標準化など、急速に変化する領域を継続的に取り込みながら、ニーズに合わせたカリキュラムへと更新していきます。また、修了者同士が学び続けるコミュニティの形成や、実務課題を共有する場の整備も検討しています。

名古屋大学医学部附属病院メディカル IT センターは、NCIP を通じて、医療現場、産業界、研究機関、行政をつなぐ人材育成の基盤を築き、医療 DX を支える実践的な学びの場を発展させていきたいと考えています。



図3 / 2025 年度第2期生履修証明プログラム修了認定式 (2026 年3月15日)